
コトバヒトツ

古時灯葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コトバヒトツ

【Nコード】

N8775P

【作者名】

古時灯葉

【あらすじ】

図書館からの帰り道、近くの運動公園で中学サッカーの県総合大会が行われていた。ちょうど、私が通がかかったときに通っている中学の試合が行われていた。サッカー部の部長と私は、交際していた。

夏を控えた空の下、一瞬の静寂を切り裂くように鳴らされた笛は終わりを告げた。ボールが客席に飛び込み、我慢できないと叫ぶかのように跳ねていく。

糸が切れたように、へたりこむ男の子がいる。一人だけ、派手な色づかいの服を着て、ボールを蹴る相手に立ち両手を広げ、後ろに広がる網に入れさせないとする闘志を見せていた姿はどこに行ったのか。駆け寄ってきたチームメイトに取り囲まれ、袋だたきにあっていた。

学校の選手達が互い違いに一人一人がゴールに向かい合い、サッカーボールを蹴って枠に入れる。

この結果次第で勝ち負けが決まるのだろうかということは疎い私でも、すぐに知れた。

図書館で本を借りるために出かけ、その帰り際に歓声に惹かれてやってきた私。すべての経過を見てきたわけではないし、試合も出口の一番近くで見守っている。

目を細めたところでボールと網の距離は目と鼻のあたりでしか見れなかった。

私でも、足を振りぬけば入るのだろう。

簡単そうだなと思ったけど、そうではなかったのだ。

中学総体県大会（でかでかとした旗が競技場の入り口に張られていた）。彼らには、打ち込んだ3年間がかかっている。努力してきた結果が、目の前のボールに込められているはずだ。傍目で見ている、それも初観戦の私ですら手の平から汗が滲み出る。暑かったからだったけど。

でも、そこには悲壮な空気はない。ただ、着々と物事は進むだけだ。勝った者だけが、スポットライトを当てられる。それもこれも結果次第。

決着がつき今に至る。

視線を動かしただけで、勝った華やかな雰囲気はがらりと変わってしまう。

嬉しそうな雰囲気に取り残された、色の違う人達、つまり相手校は真ん中に立ったまま、微動だにしない。うなだれたままのもしれば、黙って虚空を見つめているのもしる。

彼らは敗者だ。

私の通う学校のメンバー。そんなわけで、クラスメートもいる。茶に近い黒髪で背番号10のちゃらい奴を筆頭に何人も。

勝者に一番近い位置で腰に手を当て、うなだれることもなく、彼らから視線を離さない違うクラスの彼がいた。

腕に巻かれた黄色い腕章は主将の証。

押しも押されぬチームの大黒柱。主将である彼は、生徒会長の私

にとって顔なじみである。

正直話すと、私と主将の彼、惟島壮太は付き合っていたりする。

それは、学校中の秘密。でも、ばれたところで何も変わらない気がする。

惟島も私もそういう人間だ。

惟島と付き合い始めた時期ははっきりとしたきっかけがあったけど、実際定かではない。

ただ、彼と話しはじめた時期は私が生徒会長になってからすぐだというのははっきりしている。

副会長になったサッカー部の奴が仕事をしなかったのだ。

始まって一カ月もしないころ、私は部長も出席していた集まりで惟島に対して、はっきりと言ってしまったのだ。あなたの部活の一人のせいで私たちは大変な思いをしている、と。そして、部長ならそういうことに対して責任をとるんじゃないの、と。

惟島はしょうがないともいわず、わかったと文句も言わないで副会長がやるはずだった仕事を手伝ってくれた。

そんなこんなで生徒会副会長の仕事はいつしかサッカー部の部長がこなすようになっていて、私もそれが当たり前のようになって

いった冬のある日、私は惟島からそういった予兆もなく、告白された。

好きだ、と。

生徒会室の年末の大掃除だったはずだ。他の役職の生徒は、塾だか部活だかで一人一人抜けて行って私だけが特にこうといった理由もなく掃除を続けていたら、惟島もいつの間にか手伝っていて、それでも黙って作業を続けていったのちに白く濁った息とともに吐き出されたようなものだった。

私もその告白のようなものを自然に受けていた。ああ、いいよ。と、でも言うように、振り向きながら。そうだ、その時私は本棚の整理をしていた。

惟島はぶっきらぼうな顔のまま、唇をかすかに曲げていた。

私たちは自然と唇を重ね合わせていた。

わけでもなく、年越し前にも終わらなそうな大掃除を黙々とこなすしかなかった。

年内に私たちの関係がそれ以上近づいたわけでもない。

だから、といって今までの生活は不思議と変わらなかった。

惟島は惟島で部活が忙しく、役割も忘れた副会長の仕事もいつ時

間が割けるのか、こっちが疑問に思うほどにこなしていて、私も私で、生徒会の仕事に学校の予習復習、自分の習い事に忙しかったのだ。自転車を押して一緒に帰ると言ってもやったことがなかった。

サッカー部のキャプテンだからといって、惟島はさして女子生徒から好かれているわけではなかった。サッカー部の女子マネージャーはエース（９番というらしい）とつきあっていたし。学校生活でも、惟島は体がでかいだけで他ではあまり目立たなかった。部長なのにリーダーシップも発揮しなかった。

私も同じような感じだ。生徒会長とは名ばかりで、クラスのグループもあまり目立たないグループにいた。勉強ばかりしているような外見の私に好意を持ってくれる男子はあまりいなかったし、彼らはバスケットやテニス部の女の子らしい女の子ばかりに好意を持っていた。

そう考えると、どうして私たちがくつついたのかは不思議だった。

彼氏らしいことも彼女らしいこともしたのか？　と言われればしなかったとしか言えなかった。が、そういうものだった。時たま、惟島のために勉強を教えあげたりしたけど、小説みたいに、それが彩りに満ちたものではなかった。先生が授業中に教えたことを私なりに噛み砕いて伝えたただけだ。休みを入れたときに、惟島が独り言のようにサッカーの話をしていた時にだけ、私はああこいつと恋人なんだと感じていただけだった。

ただ、私はリバプールだかマンチェスターだかトリノだかラツィオ、果てはラ・コルーニャだかバレンシアと、世界地理の細かいとこばかり頭に残ることになったし、あいつもあいつで確率の求め

方だとか、高校数学で使うような定理ばかり口ずさめるようになってのは明らかに互いのせいだと思っていた。

だから、私は惟島が試合している所も見ることがなかったのだ。あいつも見るなどは言わなかったが、そもそもいつ、どこでも教えなかった時点でそういつているのと同じだ。私はそういうことをごり押しでは聞かない。そもそも、部活の試合なんて観戦する人間なんて、部員以外、親族くらいなものじゃないのか？

ただ、中学最後の大会、県大会（上位までいけば関東大会に出場するらしいが、そうなるとは私は思わなかった。そうなるところまで行けば、学校中を挙げて応援しなければならないし、私も何かしらの会で部にエールを送らなければならない。部長である惟島の前でそれを読み上げるのだ）が私の住む町で行われるらしいというのは知っていて、私は図書館に本を借りに行つて、数日は満足して過ごせそうな冊数を貸し出してもらつて、さて帰ろうとしたとき、隣にある運動場でボールのけられる音や歓声が聞こえてきて、そういうばと思ひ出して、一回は見えて見ようと意を決して向かつて観戦してそうなたところを目撃したのだ。

ああ、しどろもどろに思考がこんがらがっていく。

試合には負けてしまったけれど、試合中、私は惟島によく目が行つてしまった。

私の彼氏だからでもなく、ただ転がり蹴っ飛ばされるボールの行方を追っていたら、惟島がしょっちゅうボールの横にいたのだ。私

がそうして惟島に目を向けていたわけじゃない。

転がってきたボールはどうしてか、一度は惟島の足に収まって、前後左右に蹴っ飛ばされていった。

まるで、指揮者のように。

惟島は、試合のすべてを支配して、自ら幕を締めた。

茫然としたまま、時間だけが過ぎて行つた。知らない学校同士が、球をけりあっていた。

ここからだとお互いの選手の掛け声が重ねあつて聞こえてくる。

どちらからも、必死に叫ぶように。

どちらの学校も、最後の大会と言って等しいのだ。どれくらい集まっているのかはわからないけれど、先へ進めるのは、ごく一部でしかないのだ。

私にはその気持ちはわからない。部活に所属するでもなく、習い事で水泳をしていた私にとって、立てるべき目標は自分自身の記録を超えることだった。賞や順位はその後についてくるものだし、別に記録会で、自分の記録を超える必要はないのだ。そんなのは、一人で泳いでいても可能だし、そのための努力も、手を抜いたこともすべて自分に跳ね返ってくる。そして、それは中学、高校とやろうと思えば続くだろう。

彼らみたいに、倒すべき相手が自分ではないというのは私には実感はわかなかった。

駐輪場に止めてあった自転車の鍵を開けた私は、知らず知らずに行き先を決めていた。

やはり、惟島はそこにいた。

学校の帰り道にある川沿いの道。対岸を結ぶ橋の下の日陰。近くにつれて、聞き慣れた音が鼓動のように響いた。

いつも、全体練習が終わった後で惟島はここで練習するのだ。

惟島は私がいることに気がつかない。腰に手をあてたまま、戻ってきたボールを止めて、壁に向かって睨みつける。一つだけ息をつくと、前触れもなく蹴った。

右に向かったボールは、角度がついたまま壁にはねた。遠ざかっていく。追いついた彼は、すかさず反対側へと蹴った。それを淡々と繰り返す。

部活の後の日課だった。それを見ながら私は好きな本を読んでいたりしていたのだ。

何か声をかけてみようかと考えた。

しょうがなかったよね。とか、頑張ってたじゃんとか。

そんな言葉をかけるほど私は無分別じゃない。私がそんな言葉をかけたところで惟島は面食らうことだろう。そんな、軽い言葉遣いを私はしたことがなかったのだ。

三年間も頑張ってきた彼らが積み重ねてきたものと、たまたま見かけたから、そのまま見入ってしまった私との温度差は違う。私だけが努力してきたものと、惟島含め部活の仲間で作り上げた努力の総量は断然に違うのだ。

目の前のボールを、夢中になって蹴って、淡々と繰り返すのだった。好きでなければ続くようなものでもない。

私は、何も言うことがないままに惟島が蹴り続けているのをただ当てもなく見ているしかないのだ。

それが、恋人関係としていいのかどうかもわからない。どうでもよかったのだ。私にとって。卒業して、別々の高校に進学するかもしれない、いや十中八九そうなることが分かっているくせに、終わりになんて知らないかのように付き合ってきた今までだから。

そうして、続いてきた関係なんだから。

そう思案に暮れていた私が、いつの間にかボールの音が聞こえな

いことに気がつくのには時間がかからなかった。

惟島は黙って私の隣に座っていた。

嗅ぎ慣れた汗のにおいはそれが当たり前となっていた。

そうやって、いつも気づかれないままに私のそばにいる。

「いつからいた？」

それは、向こうのせりふだった。私が言うようなそれではない。

「少し前」

素っ気ない返事に私もそう、とそのまま返した。淡泊な関係である。クラスメートにも、先生にも、私たちはそう思われている。誰も私たちの関係になんか築いていないのが現実で。それでも、続くだろう。終わりを見せても、誰も話題になんてあげやしない。

お互いに黙ったまま、私も惟島も、相手を見続けていた。

「見てた」

何を？ 主語がない、その言葉に意味はなかった。

ただ、間を繋げたかったのだ。

「そう」

惟島はそう返したまま、返さない。

サッカーはうまいのにね。

夕方に近いのに空はまだ空のままだった。

寝転がっていたままの私の目の前に、そっと手を差し伸べられる。

ためらいなしに手を握った私は引っ張りあげられる。

立ち上がる私と惟島の間になんだけ距離ができる。

その合間で私たちはうつむいていた。

何もしゃべることもないままに。ずっと黙っている。

お気に入りのぬいぐるみを抱きしめるように、抱き合うのが恋人同士なのかもしれないけど、私たちの場合は違った。

惟島は私に背を向けた。

帰ろう。

そういう惟島に私はうんと言えることができなかった。

ここで、こう終わらせちゃいけない。素っ気ない態度を決めかねてはいけないのだと思った。私は、惟島の何だ？　ただ、隣にいただけの存在？　お互いの甘酸っぱい学生時代の思い出。ああこんな時もあったな、と将来、ふと振り返るその一瞬。

なんだかんだ言って、私はこいつの事が好きなんだ。

それを伝えることができないままで。

こんな時ですら、何も声をかけられないんだから、ずっとそうな
ってしまうんだ。

なら、後悔する。

そう思った。

「一番輝いてた」

口から飛び出した言葉をどう受け取ったかわからないけど、惟島
はぶっきらぼうな顔のまま、かすかに笑みを浮かべたように思えた。

あいつはそうやっていつも照れ隠しをする。

そのことを、私だけが知っている。

(後書き)

言えた言葉以上に聞こえた言葉はそつと二人を恋へ誘うようなワン
ダーワード「SUPER CAR／WONDER WORDより」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8775p/>

コトバヒトツ

2011年1月8日22時54分発行